帝国主義の腐朽性に抗し
共同反革命を蜂起-内戦へ！
共産主義者同盟（戦旗派）

# 戦旗

10月5日
5日、20日発行
408号
1部　100円
編集発行人　鹿島　昂
購読料　1部　20回　2600円
（郵送料含む）

戦旗社
東京都新宿区新宿5の2の9
コーポハピービルE1号
電話　03（356）2982
振替　東京7－26110

# 10・20反戦集会に結集せよ

## 韓国労働者の進撃に続き、戦争策動うち破る秋期政治決戦の完遂かちとれ！

全国の同志諸君・労働者・農民・学生・市民の皆さん！

現在、自民党・大平政権によって衆議院の解散が強行され、一〇月七日の投票日へ向けて総選挙戦に突入している。

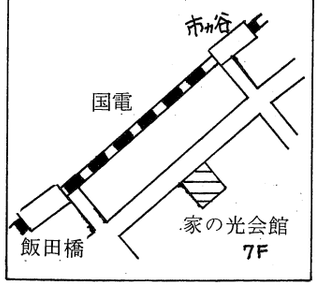
大平は一般消費税の導入や増税をちらつかせ、七三年「石油ショック」以来の深刻な慢性不況を乗りきらんがためになしてきた国債発行による財政危機のつけを人民への犠牲の転嫁で返さんとしており、増税＝財政再建をかけた選挙の様相を呈している。

しかし、通常国会冒頭での大平所信表明演説でも「八〇年代を展望する曲り角」と述べられているように、今回総選挙のテーマは八〇年代へ向けた自民党＝日帝ブルジョア共の総合的戦略や政策の支持、承認を問うものとしてあるのであり、またそれらの実現をはかるものとして財政再建や二七一議席確保＝長期安定政権化がめざされているのだ。

「対話」拒否・空港実力廃港を鮮明に打ちだした
反対同盟に応える2万の人民（9・16 三里塚）

## 10・20反戦講演集会

日時　10月20日（土）6時半
場所　家の光会館（国電飯田橋下車）
講師　高野　孟・平良　修・部落解放同盟・三里塚反対同盟・全国一般南部支部他
主催　10・20集会実行委員会



すなわち、この間、日帝大平が打ちだしてきたアジア太平洋圏諸国への侵略反革命をもくろむ環太平洋圏構想、対朝鮮政策の歴史を画する日米韓軍事一体化策動、「日米防衛協力の指針」の具体化としての日米共同軍事演習、産業構造の再編―大量首切り・合理化、増税、原発政策、労働戦線の右翼的統一策動、狭山・三里塚闘争などの破壊と分断など、政治・経済・社会・軍事・文化を貫く総合的安保戦略の承認を迫るものなのである。

自民党はこのような意図を一切かくしており、社共など既成勢力も「増税反対」は唱えても、その背景にある根本的な争点を人民に明らかにしていない。

かかる情勢のまっただ中で、われわれは一〇・二〇反戦講演集会をかちとろうとしているのだ。集会に課せられた任務はまったく鮮明である。

**まずなによりも韓国の野党新民党総裁金泳三氏の朴打倒宣言に示される、御用政党さえもつき動かされざるをえないような韓国民衆のかつてないほど広範な反朴の意志と決意に、日本人民として応えぬかなければならない。**

朴政権の未曾有の危機は、とりもなおさず日米帝の韓国支配が根底から揺ぎはじめたということであり、防衛庁長官山下の訪韓・訪米を通じた日米韓軍事一体化の促進はまさにかかる韓国情勢に根拠を有しており、われわれは一〇・二〇集会への総決起をもって、朝鮮出兵や戦争策動、八〇年防衛二法改悪を絶対に許さない日本人民の断固たる決意を示す必要がある。

そしてそれは労戦の右翼的統一とたたかう労働者、原発政策と対決する労働者・住民、狭山・三里塚をたたかう部落大衆・農民、大衆収奪に抗する人々など地域・職場・学園で日帝大平の攻撃とたたかいぬいている人民の総意を結集するものとしてかちとられなければならず、労働戦線や諸戦線内部において発生しつつある改良主義的、右翼的潮流と訣別し、八〇年代安保闘争をたたかいぬく戦闘的団結をうち固めるものとして、圧倒的にうちぬかれねばならない。

すべての同志諸君、労働者・学生の皆さん！

日帝大平は今衆院選から来夏参院選を通じて自民党の安定多数を確保し、八〇年代へ向けた体制固めをなしきろうとしている。従って問われているのは、日本労働者階級人民が、この過程で、八〇年代の戦争への国民動員策動とまっこうから対決する意志と決意と戦闘態勢をうち固めきれるかどうかということである。

すでに九・一六三里塚二期工事阻止、廃港闘争において反対同盟を先頭に全国のたたかう人民が、政府の対話＝闘争破壊攻撃をうち破り、廃港を実現すべく連月連日闘争に突入することを宣言している。

かかる反対同盟の決意に応え、また、韓国労働者人民の血叫びをうけとめきり、八〇年代闘争への突入を戦取すべく全身全霊をかけて一〇・二〇反戦講演集会の大成功をかちとろうではないか！

戦旗派は人民の意志を真に体現し、その中核としてたたかい続ける革命党―革命勢力への飛躍をかけて、総決起せよ！

# 9・16をもって開始された大反撃に続き、10・20反戦集会への総決起かちとれ！

一〇・二〇反戦講演集会の圧倒的実現へ向けて進撃するにあたって、九・一六二期工事阻止・廃港勝利三里塚現地闘争の意義と成果を徹底的に確認しておく必要がある。

九・一六闘争の意義の第一は、対話攻撃と対決する反対同盟の決意をうけ、廃港決戦の第一段として闘いぬいたことである。

七月一六日、森山運輸相による「対話」発言以来の二期工事着工に向けた反対同盟切りくずし攻撃に対して、大衆討議を続け、「対話」攻撃の本質を見ぬき、断固としてこれを拒否するとともに、二期着工阻止・廃港へ向けて闘う同盟の基本方針を九・一六集会で打ちだしたことは、闘う全国人民の先頭にたつ三里塚農民の戦闘精神をはっきりと示した。

政府・公団のうすぎたない姑息な策動は、一四年間も大地に根をおろし、身体をはって闘いぬいてきた農民魂をうち砕くことができないことを鮮明にしたのだ。廃港の実現、農地の奪還をめざしてたたかう農民にとって、現空港を認めさせ、闘争終結と二期工事をもくろむ権力との対話によって、勝利がもたらされるのではなく、徹底した闘いによってしか展望は切り開かれないことが明らかにされたのである。

われわれは狭い目先の利害ではなく、あくまでも人民の大義にたって闘おうとする三里塚農民の革命性にあらためて連帯の拍手をおくり、「対話」攻撃を事実上うち破った反対同盟の①騒音直下でたたかう岩山地区同志への連帯、②たたかう農業の同盟全域にわたる深化と前進、③毎月一回の連続した飛行阻止闘争の組織化、④政府中枢へ向け一年間にわたる連日の抗議闘争という基本的方向と決意に断固応えぬくべくたたかいぬいた。

日帝大平の「対話」攻撃という三里塚闘争史上最大の試練をうち破った同盟農民にトコトン学び、五・二〇強行開港以来、廃港への展望をつくり出しでこれなかったわれわれ支援の不充分性を克服し、困難をはねのけ、万難を排して廃港決戦勝利の戦闘体制を構築しきわねばならない。

第二に、木の根用水建設の成果をふまえ、革命の拠点＝三里塚を全人民の力で守りぬくべく決起したことである。

七月二三日、農工両全ならぬ農業・空港の共存をもくろみ、農業破壊、闘争分断をはかる政府の農振計画、成田用水計画と対決し、闘う農業を確立するための木の根用水と風車が、木の根農民と全国のたたかう人々の手によって完成した。

われわれはこの闘いの中で、農業を営みながら一四年間闘い続け、今なお不屈の闘志を燃やして闘っている農民の実存と苦悩にふれ、革命的で内在的な連帯をかちとることをめざしてその一翼をにないきった。

かかる成果にふまえ、破壊・分断攻撃にさらされている反対同盟との団結を更にうち固め、革命の拠点を防衛すべく、二万人民とともに七七年四・一七をひきつぐ総決起で闘いぬいたのである。

第三に、管制塔戦士年内奪還をめざし、一千万円カンパ、一万人署名　達成の突破口としてうちぬいたのである。

九月初旬より全党をあげて署名・カンパの目標を設定し、徹底した闘争として展開しつつ九・一六への決起をめざしてきた。

この闘いは三・二六への報復と廃港決戦の大爆発への予防弾圧をもくろむ管制塔裁判と長期勾留をうち破り、廃港勝利の陣形を作りだすたたかいとしての意義を有しており、実際、守る会・支える会などの大衆的発展と九・一六への決起もかちとっている。

われわれはこのような成果にふまえ、当面一〇月末を一つのメドに一万署名の達成をかちとり、早期奪還の展望を作りだすべく奮闘することを決意したのである。

このような意義と成果を有する九・一六闘争は総体として、「対話」攻撃をうち破り、廃港決戦勝利へ向け攻勢的なたたかいに打って出る新たな出発点としてうちぬかれたと同時に、文字通り日帝大平による戦争への国民動員と徹底対決する秋期政治決戦の第一弾をなす闘いとしてもあったということがしっかりと確認されねばならない。

八〇年代に向けて米帝と結託しつつアジアの反革命盟主として登場すべく、日米韓軍事一体化をおし進め、これへの国民総動員をもくろむ日帝大平への三里塚農民を先頭とする闘う人民の大反撃が開始され、一大政治決戦の突破口が切り開かれたのである。

かかる九・一六闘争をひきつぎ、われわれは秋期政治決戦の頂点たる一〇・二〇反戦講演集会の圧倒的成功をかちとるべく、九・一六を上回る大決起を準備しなければならない。

# 韓国労働者の血叫びに応え　朝鮮出兵攻撃と対決せよ！

一〇・二〇反戦講演集会の成功を期するにあたり、われわれの任務の第一は、韓国労働者の血叫びに応え、朝鮮出兵攻撃と対決するものとして、この集会をたたかいとることである。

**韓国民衆の闘いは、イラン、ニカラグアに続いて朴独裁と日米帝を揺がし始めた**

九月一〇日、韓国の野党新民党総裁・金泳三氏が公然と「朴打倒宣言」を発した。その内容は①九・八ソウル民事地裁決定（金氏ら新民党幹部への職務執行停止仮処分決定）は朴によるデッチあげ、②維新憲法は認められず、民主憲法が必要、③全国民的朴打倒運動をくり広げる、④国軍は朴政権に奉仕せず、国民のために任務を果せ、⑤朴政権は国民の支持を集めはじめた野党を抹殺し、〝官製野党〟を作るためのクーデター的暴挙を行った、⑥いかなる迫害にも屈せず、身命をささげてたたかう、というものである。

これまで民主人士たちから「朴政権の侍女」とさえ指弾され続けてきた御用野党・新民党総裁の発言である。このことは朴体制を支えてきた構造が崩壊しはじめたこと、朴独裁の最後の崩壊過程が開始されたことを意味し、またそれほどまでに民衆決起の輪が広がり反朴闘争の前進がかちとられてきていることを物語っているのだ。

金発言の直接的契機となったのは、YH貿易女性労働者による新民党本部内すわり込み闘争への弾圧であり、これに抗議して籠城する新民党に対する政治的報復、ソウル民事地裁による金総裁らの職務執行停止仮処分決定であった。

かつら製作・縫製会社、YH貿易女性労働者一八〇人余が工場閉鎖、首切りに抗議して行ったすわり込み闘争と、金景淑さんを虐殺

し、五〇数人の負傷者を出した朴の兇暴な弾圧という事態は、七二年一〇月以来の維新体制をぶち破り、韓国労働者と朴政権の非和解的で大規模な対決が開始されたことを象徴するものである。

日米帝の経済・軍事援助に依存し、無制限の外資導入によって、全韓国の「馬山」化的事態をつくり出し、輸出主導型経済による見せかけの繁栄をもって高度成長と称してきた朴のカイライ的政策が、世界的インフレ、石油価格の高騰の下で貿易収支の大幅赤字、深刻な不況をもたらし、貿易依存の高い産業の、とりわけ中小企業の倒産を続出させ、公式発表でも五五万人という大量の失業者（年内失業率四・二％、昨年比一％増）を生み出している中で、輸出不振で倒産したYH貿易労働者の闘いが起っていることは決して偶然ではないのだ。

まさにそのことは、朴の日米帝への依存、屈従的政策と体制の全面的破綻がはじまっているということであり、それによって犠牲を強いられてきた労働者人民の決死の闘いの噴出はもはや押しとどめることができないところまで来ているということなのである。

これを契機に九月三、四、一一と連続した数千規模の学生決起が大邱の啓明大、慶北大、嶺南大、そしてソウル大などで、YH貿易労働者との連帯、維新体制打倒を掲げて勇猛果敢に闘いぬかれている。

このように、新民党総裁金泳三氏の「朴打倒宣言」は韓国民衆決起の広がりと深さを表現するものとしてあるのであり、朴体制を支えてきた最大野党新民党の朴からの決定的離反（民主統一党も同調）こそ独裁政権の根底的な政治危機のはじまりに他ならない。

イランのパーレビ王制、ニカラグアのソモサ独裁政権がたどったあわれな最後に、今また朴も近づきつつあり、米帝・日帝は七〇年代の最後に三度目の危機に直面しているのだ。

サイダービンを手に、死を覚悟して機動隊にたち向ったYH貿易労働者、とりわけ金景淑さんの意志をうけとめ、日米帝の朴擁護、戦争策動を絶対に許さない日本人民の決意を示すことが今こそ問われている。

**YH貿易労働者の闘いに連帯し、朝鮮出兵めざす八〇年防衛二法改悪阻止の意志をつくり出せ**

朴体制の危機の深刻さは、在韓米地上軍撤退を公約していたカーターをして撤退中止を決定させたのみならず、山下の訪韓に象徴されるように日帝に朴への軍事的テコ入れを決意させ、日米韓軍事一体化の動きを活発にさせている。

沖縄で強行された米第七艦隊と海兵隊を中心とするフォートレス・ゲール作戦やそれと連動して行われた日米軍事演習などに如実に示されているではないか。

艦艇二六隻、航空機二八〇機、兵力四万人を動員して行われたフォートレス・ゲール作戦は、四五年四月一日の米軍沖縄上陸以来最大の上陸作戦として、まさに実戦さながらのヘリ進攻飛行場奪取、上陸攻撃、実弾を使った地上戦闘が展開されたのである。

この演習は防衛庁の専門家でさえ、その対象が①ソ連原潜基地、②国後、択捉、③朝鮮半島沿岸、④ペルシャ湾の油田地帯であると想定しているように、地理上からいって明らかに朝鮮半島への上陸をめざすとともに、朝鮮・中東人民を始めとする闘う人民への政治的軍事的示威行動に他ならない。

そしてかかる反革命軍事演習に永野陸幕長ら陸・海・空の幹部らが参加したという許し難い暴挙のみならず、フォートレス・ゲール作戦が最後の地上戦闘に入った八月二七～三〇日の間に、これと並行して、青森県三沢市天ヵ森射爆場で、在沖米空軍と航空自衛隊第三航空団、第六航空団によるはじめての日米共同射爆訓練や、第六次の共同戦闘機訓練が行われていることに見られるように、フォートレス・ゲールは、朝鮮半島上陸を想定した日米共同の反革命軍事演習として展開されたのである。

八月二三日、永野陸幕長が八一年から陸上自衛隊、米海兵隊の共同演習を富士演習場で実施することを明らかにした。まさにこのように「日米防衛協力の指針」として明確化された日米共同作戦体制の陸・海・空軍を貫く具体化、日米韓軍事一体化が八〇年代初頭をメドに進められつつあるのだ。

一方における実戦体制づくりと、他方において、朴政権有事の際の日米共同軍事行動、朝鮮出兵を可能とするような法的整備が防衛二法改悪案の八〇年国会上程によってめざされている。

六月にまとめられた自民党国防問題研究会の改悪案によると、①国連軍として海外派兵、②武器使用権の拡大、③私権制限を含む権限の部隊指揮官への付与、④防衛出動待機命令段階で都道府県知事に要請し、土地の強制収用、⑤統合幕僚会議を防衛庁長官に直結、議長権限を強化（統幕会議を統括する認証官とする）、⑥予備自衛官志願採用制、防衛出動待機命令段階で招集命令（陸上自衛隊では強制出頭制、三、四ヵ月前から招集の意向）というもので、国会上程の準備が進められつつある。

イラン革命、ニカラグア革命の勝利、中東情勢の緊迫化とOPEC諸国による第二の石油戦略の発動、そして韓国朴政権の重大な危機に直面し、帝国主義が世界的に戦争的まき返しを図ろうとしている中で、日米帝にとって韓国情勢の現局面に対して決定的な対応が迫られており、何よりも戦後最大規模の沖縄大軍事演習がそのことを物語っている。

日帝も防衛庁長官山下を訪韓させ、自衛隊の実戦部隊化、日米共同作戦体制構築を急ぎ、これに対応しようとしているのであり、今冬一二月から来春にかけた八〇年通常国会に防衛二法改悪案を上程する可能性が大になってきているのだ。

われわれ日本人民はなんとしても防衛二法改悪を許してはならないし、朝鮮出兵体制のうち固めと、これへの国民動員の策動をうち破らなくてはならない。これこそ戦後南北分断固定化に加担し、朴独裁体制を背後から支え、韓国民衆に苦渋を強いてきた日本労働者、学生の絶対的使命である。

われわれは、七四年フォード来日訪韓阻止闘争、七五年天皇訪米阻止闘争、七六年安保協粉砕―天皇在位五〇年式典粉砕闘争、七八年六・一五―一〇・二一反戦反安保闘争、七九年サミット粉砕・カーター訪韓阻止闘争を、韓国民衆決起に応え、安保日「韓」体制打倒をめざすものとして闘いぬいてきた。

これらの闘いは、心ある日本の労働者・学生・市民と共同してつくられてきたものであり、この革命的伝統の火を守りぬき、更に発展させるべく刻苦奪闘しなければならない。

しかし他方で、公明、民社の安保・自衛隊容認論、社会党の安保空洞化論、共産党の前回選挙からの「安保破棄」たな上げ論などが横行する中、日本人民による日米韓軍事一体化策動への有効な反撃を作りだしえていない現状を主体的にうけとめきり、今なお獄中でたたかい続けている金芝河氏の三・一アピールを何度も想起して、韓国労働者との連帯をかけた闘いを創出することが問われているのだ。

「しかしもう一人の犯人である日本に対して、私たちはどうすればよいのか」「私たちとあなたがたは、何か断固とした悲壮な覚悟で努力しなければならないと思う」「特にあなたがたは、私達が必死に反対するものを必死で支援しようとし、私達が必死で守ろうとするものを必死に蹂りんしようとしている。あなたがたはいまこれを逆にする勇敢な道徳的決断を下さねばならない」（三・一金芝河アピール）

YH貿易女性労働者たちは死を覚悟して投身組と割腹組に分かれ、サイダーボトルを手に戦ったと伝えられている。彼女達が反対しているものは朴独裁体制であり、日帝による全韓国の「馬山」化支配である。

われわれは重大な決意をもってこのようなYH貿易労働者の戦闘精神に応えぬくべく、朝鮮出兵をもくろむ防衛二法改悪案国会上程を絶対阻止する日本労農学の固いスクラムをつくりあげよう。これが一〇・二〇集会での第一の任務である。

市街地を行く上陸演習参加の米軍（那覇）

# 日帝大平の大衆収奪、闘争破壊と闘う広範な人民との戦闘的連帯をかちとれ！

一〇・二〇反戦講演集会を通してかちとるべき任務は第二に、日帝大平の大衆収奪・闘争破壊とたたかう広範な人民との戦闘的連帯をつくりだすことである。

**増税策動、右翼的労戦統一の本質を見ぬき、闘いの輪を広げよう！**

①増税問題　一〇・七投票日にむけていまや選挙戦はたけなわであり、その争点は増税問題になってきている。大平自民党政権はこの選挙へ向けて、今国会冒頭の所信表明でも財政再建が焦眉の課題であることを唱え、八四年までに財政赤字を解消するため八〇年度で三兆円の財源を確保したいとして、「一般消費税の導入か所得税の増税を行いたいむね、ことあるごとに言ってきた。最近になってから「時限立法にする」（九月一〇日）とか、「いきなり導入しても成功するはずがない」（九月二四日）などと人民の反撃にあって後退してきている。

しかし「現在の財政赤字は構造的なもの」（大蔵省）である以上選挙後の増税は目にみえている。田中官房長官は「法人税なら五〇％、所得税なら四〇％のアップが必要だが、一般消費税なら五％ですむ」と言っているが、一世帯あたり年間八万円の負担は、所得税・住民税など合わせると年収三〇〇万円の労働者で一割弱の負担になり、インフレによる実質賃金の低下や不況合理化の下では労働者にとり「五％ですむ」といった気軽な問題ではなく、絶対に許せないのだ。

そもそもこれまでに五九兆円（国民一人あたり五〇万円の借金）の国債残高をつくり、来年度で約五兆七七〇〇億円の赤字を生みだし、四兆円の借金返済、金利支払いをかかえたのはいったい誰の責任なのか。自民党政権と日帝ブルジョアジーそのものであって、決して労働者人民ではない。

七三年「石油ショック」以来の深刻なインフレ・不況というブルジョア共の危機に際して、公共投資を増やすことによって景気回復をはかり、企業の延命をなしてきたのである。財政危機が叫ばれている現在でも、「新経済七ヵ年計画」にこれまでの公共投資を五割も上回る二四〇兆円（単純平均年間約三九兆円＝七九年度予算とほぼ同じ）もの投資を閣議決定しているように、これまでもそうすることによってかかる赤字を作りだしてきたのである。

しかもこの間軍事費は七三年九三三五億円から七九年二兆八七一億円へと倍以上に増大しており、安保―日「韓」体制の戦争体制への再編を物質的に保障するものとしても国債発行―借金財政はあったといえるのである。

従って現在大平によってもくろまれている増税策動は、ブルジョア共の延命と日帝の侵略反革命政策のつけを人民に支払わせ、なおかつ八〇年代戦争体制づくりの財政的裏付けをめざそうとするものであり、決して認めることはできない。

②右翼的労働戦線統一　八月八日鉄鋼労連拡大諮問会議、八月一〇日ゼンセン同盟中央執行委で、それぞれ統一準備会年内発足をめざすことを決定して以降、八月二一日に総評の富塚事務局長と鉄鋼労連中村委員長との会談が持たれ統一問題での意見交換を行うなど、急速に労戦統一の動きがにつまってきている。

同盟の統一条件は、労働組合主義や国際自由労連への加盟、民間先行というものでつまり改良主義（労資協調）の立場にたち、政治闘争、政治ストはやらず、米・EC諸国などの帝国主義的労働運動派と連帯しようというまったく右翼的な代物である。

しかもゼンセン同盟、鉄鋼労連などは、現在二一民間単産、一組織で形成されている政策推進労組会議の主要単産であるゼンセン同盟、造船重機労連、電力労連（同盟）、鉄鋼労連、合化労連（総評）、電気労連、自動車総連（総連合）などを中心に統一し、その後官民含めた全体的統一をはかろうとしている。まさに日帝戦略産業下で帝国主義ブルジョア共に屈服し奉仕し続けてきたもっとも右翼的な労組を中核とした統一運動なのであり、戦前の産業報国会運動に比すべきものとしてとらえないわけにはいかない。

これに対して総評は、八月一六日民間単産会議幹事会で、(1)大会決定に従い積極的にとり組む、(2)労働組合主義や議会制民主主義を守る問題は言葉の問題ではなく運動の中身が大切、(3)国際自由労連加盟については先進国ナショナル・センターとの交流強化ということにとどめる、などの確認を行い、統一の方向をめざしている。

この間の春闘での連敗、インフレ・不況下での賃闘方式の破産といった総評運動のいきつまりを、改良主義・経済主義の問題として克服しようとするのではなく、ただただダラ幹共の自己保身と延命のために、踏み絵として提起されている労働組合主義と国際自由労連への加盟問題をアイマイにしたまま、なりふりかまわず右翼的統一へとつき進みつつある。

そもそも労戦統一なるものは、歴史的にも五九年、六七～七二年、そして今回の七九年という六〇年・七〇・八〇年を前後する時期に持ちだされてきているように、ブルジョアジーが、階級闘争を圧殺し、次の十〇年間の支配体制へと労働者人民を解体統合してゆくための運動なのだ。

従って現在の動きも八〇年代へ向けた国民統合策としてかけられてきた支配者階級の攻撃であり、総評四五五万人が他の三団体と統一して一二七三万人になったところで、決して労働運動の発展、人民の利益が保障されるわけではない。逆に首切り、合理化、賃下げなどをこれまで以上に許し、既得権を次々に奪われ、ただ帝国主義者の命ずるままに、戦争にでもなんにでもかり出されてゆく存在に陥しこめられてしまうのだ。

だからこそ下からこれに迎合していこうとする改良主義指導部と訣別して闘わんとしている労働者人民との戦闘的連帯がかちとられねばならない。

**狭山・三里塚・反原発を闘う労働者人民と連帯し、80年代へ向けた戦争への国民動員とたたかいぬけ！**

③反原発闘争　今春スリーマイル島原発事故をきっかけに労働者や住民による反原発闘争が拡大してきており、七月二七日にも「労働者の手で原発をとめよう首都圏集会」が約五〇〇人の結集でかちとられた。アメリカでは九月二三日二〇万人がニューヨークに集り、一〇年前のベトナム反戦集会以来最大の原発反対集会が開かれており、西欧諸国でも数万人規模の反原発闘争がたびたび闘われている。

日本でも今後発展がかちとられるべき闘いであるが、帝国主義国における支配階級の反革命的反人民的原発政策との対決をなす闘いとしての位置を有しているのである。

日帝は既に一八基の原子力発電所建設を強行し、今後数年間に三〇余基もの建設を計画しており、とりわけ、東京サミットを頂点として「石油危機・エネルギー危機」のキャンペーンをなし、OPEC諸国への対抗と、帝国主義の危機のりきりをかけ、原発政策の強行的推進をなそうとしている。

石油製品の値上げによって人民に犠牲を転嫁して生活を切りつめさせ、他方、そのあがりで原子力開発を実現しつつ、核武装や、エネルギー源の転換による産業構造の再編成＝大量合理化をやり、もってブルジョア的延命をはからんとする攻撃を決して許すことはできない。

この間、ねばり強く反原発闘争をたたかいぬいてきた労働者・住民・市民のたたかいを断固支持し、ともに連帯して八〇年代闘争の発展と前進をつくりだしていかねばならない。

④狭山、三里塚闘争　これらの闘いは今重大な局面に突入している。共に七〇年代の闘いの中に大きな位置を占め、労働者人民に多大の政治的思想的変革を問いつつ、権力の支配の根幹を揺がす闘いを続けてきた。

そうであるが故に、今日帝大平は対話攻撃をもって三里塚反対同盟の団結破壊と闘争圧殺をもくろみ、再審棄却によって部落解放戦士石川さんの獄死と戦闘精神をくじくことをねらい、狭山・三里塚闘争の解体をはかろうとしているのである。

しかし反対同盟農民は徹底した大衆討議を通じて団結を守りぬき、対話拒否、一年間の連月連日闘争をもって二期着工を阻止し、廃港を闘いとることを九・一六集会において宣言したし、部落大衆は自立自闘の自己変革運動を展開し、全国行進、同盟登校を貫徹して八・九への圧倒的な大衆決起と高裁包囲糾弾闘争を爆発させると共に一〇・三一へ向け、再審棄却阻止の大衆的実力闘争で闘うことを決意しているのだ。

このような三里塚農民・部落大衆の決意になんとしても応えぬく人民の大反撃が開始されなければならない。

日帝・大平の闘争破壊攻撃を吹きとばし、二期着工、再審棄却を断念させ、三里塚空港の廃港と石川一雄さんの無実奪還がかちとられる空前絶後の一大人民決起こそ問われているのだ。

日帝ブルジョア共の八〇年代への延命を許さない闘い、朝鮮出兵とそれへの城内平和づくり、国民動員策動をこっぱみじんに打ち砕き、農民殺しの空港政策、部落差別・人民分断策をできなくさせる闘いがつくり出されねばならず、そのための闘う人民の戦列がうち固められなければならない。

日帝・大平による増税攻撃、右翼的労戦統一運動、首切り・合理化、原発政策、二期着工、再審棄却策動はどれ一つをとっても支配階級の八〇年代戦略―総合安保戦略と結びついた攻撃である。第三世界人民の勝利的前進に対する戦争的まき返し戦略を支える体制づくりのための再編策動である。

だから人民の反抗が至る所で火をふき、闘いのすそ野はいやでも拡大せざるを得ないのだ。そこで問われているのは日帝―大平の戦争への国民動員策動と闘う労・農・学・市民の戦闘的団結の形成で

あり、総評指導部の改良主義的たたかいの模倣ではない。現にそのような闘いでは賃上げも合理化阻止もかちとれなくなり、ブルジョアジーと帝国主義労働運動派による右翼的統一運動へとからめとられようとしているではないか。

従って一〇・二〇集会の第二の任務は日帝・大平の大衆収奪・闘争破壊と闘う広範な人民による戦争への国民動員を打ち破り得る強固な連帯を実現することである。

# 80年安保を闘う潮流建設をめざし、10・20に総力をあげて決起せよ！

一〇・二〇反戦講演集会でかちとるべき、われわれの第三の任務は八〇年安保を闘う潮流建設をめざし、今春、今夏で蓄えた全ての力を出しきり、全党の総決起をかちとることである。

今回の総選挙は、増税をめぐって争われている。しかし大平は人民の反撃をうけてそれさえもおろそうとしており、全く争点不明の選挙戦におとしこめられようとしている。既成野党は争点を確保するため、「増税反対」「増税かくし」を叫んでいるが、真の争点を明らかにしえず、日帝・大平体制への屈服の度を深めているのである。

アジア人民・韓国民衆への戦争的まき返しと、それへの国民動員をねらう日帝大平の総合安保戦略こそ八〇年を前にした今選挙の本当の争点でなければならないのだ。大平は既成野党でさえ、かかる方向へと解体・再編・統合しようとしているのだから。

しかし、保革伯仲の幻想に酔い、なりふりかまわず権力獲得を夢みて公明・民社などは安保・自衛隊容認に走り、新自ク・社民連を加えた選挙共闘から新党結成（九月八日田中官房長官発言）し、自民党との連立政権（民社党第二四回大会）を展望しており、社会党もこれらの動きに規定されて「安保空洞化論」（平和外交で安保条約の外濠を埋めて空洞化させる）を提唱、事実上の安保破棄おろしをもって将来の野党連立政権（現在単独党建設）への地ならしをし、共産党も前回総選挙での安保破棄たな上げからますます中間主義化しつつあるのだ。

これでは大衆にはかくしながらもはっきりした反革命方針をもつ自民党のまき返しが一時的に成功し、方向を見失っている野党、とりわけ社会党が大きく後退するという巷の予測も根拠があるというものである。

他方連続して春闘に敗北を喫している総評指導部が、改良主義故に高度成長期にはブルジョアのおこぼれにあずかることはできても、現在のような長期的インフレ、不況下では何も獲得できないことによって展望を見失い、右翼的労戦統一にその延命の道を求め、日帝・大平による八〇年代支配体制への再編を下から支える方向を歩みつつある。

このように目先の利益に目を奪われ、闘いの戦略的方向を持ち得ない改良主義・経済主義的部分は現情勢下では、改良の果実さえも獲得出来ず、挫折し、帝国主義ブルジョアの八〇年代戦略に組み込まれていかざるをえない。

かかる傾向は政党や労働戦線のみならず、全る闘いの内部に発生し得るのであり、新左翼の中でも八〇年代の闘いの方向を提起しえず、人民の内在的発展とは関係なく既存の闘いに政治的に意味付与し利用していく傾向さえ見うけられ、われわれとてもそれから自由ではないことをしっかりとふまえておかねばならない。

あの七〇年安保闘争の際、大衆運動（学園闘争）の高揚に目を奪われ、その運動に「個別現実的共同体の獲得」なる意味付与をして、安保決戦の政治的、戦略的意義を認めなかった「叛旗派」「松本礼二派」、そしてその対極としての大衆運動の延長線上に戦術の左傾化をつぎ木して権力奪取を夢想した「赤軍派」など長期的に見て権力と自からによって解体されてしまっているではないか。

従ってわれわれは大きく八〇年代を見すえ、目先の現実に目を奪われて長期的・戦略的方向の下に戦闘体制をつくり出し得なかった第二次ブントの悪しき傾向を内的に止揚しつつ、日帝ブルジョアジーの戦争的まき返しをもくろむ総合安保戦略、とりわけ、朝鮮出兵と戦争体制構築をめざす防衛二法改悪と対決する八〇年安保―日韓闘争を戦取すべく潮流建設を進め、戦列をうち固めていこうではないか。

そのため、日帝・大平の様々な攻撃と戦闘的に闘う全ての人々と連帯し、地域・職場・学園において、改良主義的指導部の右傾化に怒りをもちながらも闘っている労働者人民の正当な要求をうけとめ、八〇年安保闘争を闘う闘争陣形をつくりあげるためにねばり強く闘い続けるのでなければならない。

われわれ戦旗派はその中にあって、不断に労働者、農民、学生、市民との現実的交流を実現し、人民思想を深めつつ、あくなき革命的共産主義者への飛躍をめざし、八〇年代を長期持久に闘いぬくことによって「侵略反革命を蜂起・内戦に転化せしめる不抜のボルシェヴィキ党建設にまい進しよう。

以上、一〇・二〇集会の第三の任務は八〇年安保を闘う潮流建設をめざし、今春、今夏で蓄えた全ての力を出しきり、全党の総決起をかちとることである。

全ての同志・友人の皆さん！

争点不明の総選挙、議会主義政党による茶番劇をしり目に、八〇年安保粉砕の旗を鮮明に掲げ、狭山・三里塚、沖縄、日韓、反原発、労働運動を闘う全る人々を結集し、日帝・大平と闘う戦闘的潮流で会場をうずめつくして、一〇・二〇反戦講演集会の圧倒的成功をかちとろう！

昨年六・一五安保講演集会、今夏六・二三サミット粉砕集会をかちとってきた成果にふまえ、戦旗派、労共闘、学共闘の文字通り総力決起で集会を闘いとろう！

八〇年代闘争陣形の構築をめざし、秋期政治決戦の一大頂点としてうちぬけ！

政府・公団の対話攻撃をうち破り、二期着工阻止、廃港決戦勝利の決意をうち固め、一〇・二一三里塚現地闘争に連続決起せよ！

解放同盟の決意うけ、一〇・一〇検察側反革命意見書攻撃粉砕！狭山再審決戦勝利！ 石川氏完全奪還の一〇・三一大決起に向けて進撃せよ！

# 10・21三里塚現地へ総結集せよ！

## 招請状

三里塚芝山連合空港反対同盟委員長 戸村一作

九・一六集会は、一八〇〇〇余名の大結集となり、成功裡に、更なる廃港に向けての闘いの陣形が確認されました。

私共、反対同盟は従来どおり、対話拒否、空港廃港をめざして闘うという基本姿勢を明らかとし、三里塚闘争は、労農学の団結を更に打ち固め、新たな闘いへの出発点についたのであります。（中略）

政府・公団は、暫定開港の既成事実化の上に二期工事の強行を虎視眈々とねらっており、そのために反対同盟と三里塚闘争を総がかりでつぶそうとしているのが現状であります。

私共、反対同盟は、このような基本的な攻撃を前にして、これを本当にはねかえす強力で広汎な闘争体制を築きあげなければならないと考え、一年間の連続闘争の方針をうちだしたのであります。（中略）

私共の団結と決意は、微動だしておりません。九・一六を新たなはじまりとして、更に強力な攻撃を敵にあびせかけなければなりません。

私共はそのために一〇月二一日に大集会を開催することにいたしました。いうまでもなく一〇月二一日は、国際反戦デーであり、この日に三里塚現地闘争を闘うことの意義は、かくべつなものがあると思います。

現在、政府は再びみたびあの悲惨な戦争に向って、人民をかりたてて、戦争と反動の道をまっしぐらに突き進んでおります。

特に沖縄では米軍と自衛隊が一体となって史上最大の演習がくりひろげられ、今や沖縄は戦場さながらの島と化しております。

三里塚空港も又、軍事空港であることはもちろん、敵の必死の三里塚つぶしの攻撃も根本的にはこのような戦争準備の一環に他なりません。

今こそ闘う人民の総力を三里塚闘争に結集して、このような全国に吹き荒れる戦争と反動の攻撃を打ち砕かなければなりません。

動労千葉の労働者はジェット燃料増送拒否をかかげて、一〇・二一ストライキ実現にむかって、あらゆる妨害をはねのけ、闘い抜いております。

又、パイプライン着工強行に対して沿線住民の怒りはますます高まっております。

一〇・二一には、三里塚廃港に向けて闘うすべての労働者・学生・住民の皆さん、地域住民闘争を闘う皆さん、戦争と反動に反対して闘う全てのみなさんの、史上空前の大結集で、二期工事粉砕、飛行阻止、空港廃港の全人民の怒りをたたきつけ、その中から、八〇年大闘争へとむかってゆきたいと思います。

全国の皆様の多数の御参加を心からお願いして招請状といたします。

一九七九年八月二一日

記

一、名称 二期工事粉砕・飛行阻止・空港廃港・国際反戦全国総決起集会

一、日時 一〇月二一日（日）正午

一、会場 未定

一、主催 三里塚芝山連合空港反対同盟

「連月連日の闘いで廃港に追いこむ」

# 反対同盟、戦闘宣言発す！

## 「対話」攻撃吹きとばす

## 9・16 二万の大人民決起

### 飛行を完全阻止！たいまつデモ岩山台地を制圧！

九月一六日、三里塚廃港に向けた反対同盟の戦闘宣言が発せられた。

現空港の安全と二期着工を唯一の目的とする「対話」攻撃に一大痛打が浴びせられた。廃港決戦の第一弾にふさわしく、全国二万人民の大結集で九・一六現地闘争は圧倒的な成功をかちとったのだ。

われわれは、この同盟の決意と一年間の方針をしっかりと受けとめ、絶対に勝利すべく奮闘しなければならない。

**二万人民決起で会場を埋め尽す**

会場の三里塚第一公園には、早朝から全国の闘う人々が結集してくる。全逓・全金などの労働者、部落解放同盟、これまで最大の百名で参加する全障連、日本原や北富士の農民、関西新空港に反対する人々、鹿島や空港周辺の住民、全国家族会、そしてカクマルの組織破壊に抗して労農連帯の旗を守りぬく千葉動労…。

会場入口では沖縄人彫刻家金城実氏の巨大なレリーフ「戦争と人間」が人々の目を奪い、反戦を訴えている。

マスコミの同盟分裂・動揺キャンペーンをはね返し、三里塚をわが闘いとする全国の人民の総決起がかちとられたのだ。

**対話拒否、実力闘争で闘いぬく**

一二時三〇分、内田行動隊長の開会宣言で集会は始まった。

病気療養中の戸村委員長に代わって石橋政次副委員長が主催者あいさつに立つ。「対話を拒否し、実力闘争を主体として廃港に追い込む。空港に必要な土地を武器として最後まで闘いぬく」―同盟の基本姿勢と決意がはっきりと打ち出された。

続いて、北原事務局長が基調報告を行う。北原氏は二期阻止・廃港めざし「本日をもって一年間の連続闘争を開始する」と宣言し、毎月集会、「戦う農業」の拡大などの基本方針を提起し、会場は割れんばかりの拍手につつまれる。「三里塚闘争は三里塚、芝山農民だけのものではなく全人民のものだ。生命をはり、今なお獄中に囚われているものもいる」。そうだ、われわれ一人ひとりが責任を分かち合い共に闘うのだ。

**三里塚と全国の団結をつちかい廃港へ！**

この提起をうけて共闘団体、全国の仲間の発言が次々となされていく。

連帯する会・廃港要求宣言の会の前田俊彦氏は訴える。「三里塚はあれこれの要求ではなく道理に立脚する闘いだ。二期をやるならやってみろという闘いをつくろう！」。

また周辺住民会議の代表は「おくればせながらがんばっている。対話―切り崩しを許さず共に闘いぬこう」と表明し圧倒的な拍手をあびた。五・二〇開港によって敵の矛盾は広がり、闘いのすそ野も広がっている。三里塚の大義は人民をひきつける。この中でつちかわれる団結こそ廃港勝利のエネルギーなのだ。

**敵が出る前に、出られないようにする闘いを！**

反対同盟からの決意表明は、同盟の分裂・動揺といったマスコミのデマを完全に打ち砕いた。

まず小川源さんが登壇する。「畑地かんがいへの協力ありがとう。この風車が回っている限り、二期工事は絶対させない」。

天神峰の石毛さんに続いて東峰

秋期政治決戦の勝利かかげ、三里塚市内デモを貫徹
（9・16 三里塚）

の島村良助さんは政府への怒りをぶちまける。「一三年前、運輸省は門前払いした。さんざんぶちのめしたぶらかし、機動隊を使って四千メートルをつくった。それが対話とは何ごとか」と。

青年行動隊の発言で闘いの決意と方向は一層具体化されていく。「戦いというのは、敵が出る前に出られない状況をつくり出すことが勝利の道なんじゃないか。二期着工に向けた政府の策動を一つひとつ打ち破っていく必要がある」。このため、①騒音直下の岩山・朝倉地域の家屋防音、②戦う農業の同盟全域への深化と前進、③毎月一回の連続した飛行阻止闘争、④政府中枢への一年間連日の抗議闘争の四点が提起され、全体で確認されていった。

更に、老人行動隊から八二歳の田中さんが、そして婦人行動隊長の長谷川さんがそれぞれ決意表明をし、大会宣言（別掲）が高らかに読みあげられていく。

全ての参加者はこの宣言に心を一つにして二期阻止・廃港の決意も固く、岩山へのデモに出発した。

**岩山台地に飛行阻止の炎立つ**

夜八時、手に手にたいまつをもった農労学が野戦から出発する。暗闇の岩山台地をくねって進むたいまつの明かりは、空港を飲みつくす大蛇のようだ。アドバルーン、照明弾、花火などで飛行は完全にストップした。

岩沢さん宅にさしかかると、なかばあさんが元気にあいさつしている。騒音直下のため、耳が悪くなり、心臓もまいる。夕方はジェットのガスでのどが痛くなるという。岩山地区への連帯を強め廃港に追いこむことをあらためて決意する。

## 9・17

# 全三里塚被告釈放・無罪・処分撤回！

# 中央総行動に六百が決起

九月一七日、全三里塚被告の釈放・無罪・処分撤回・中央総行動が、全三救と開港阻止決戦統一被告団の主催のもとにたたかわれ、東京地裁をはじめ、郵政省や電々公社など中央諸官庁への抗議行動が展開された。

前段集会の会場となった日比谷小公園には小雨をついて、十一時前より反対同盟、各救援会、家族会など六〇〇名がぞくぞくと結集し、「管制塔月三回指定粉砕」「処分撤回」などの旗がいたるところにかかげられるなど熱気あふれる中で集会が開始された。

最初に開港阻止決戦統一被告団より、五・二〇第一グループにたいする拙速裁判―有罪判決にみられる東京地裁の開港阻止決戦裁判闘争への弾圧を許さずたたかおう、そしていまだに保釈されずにいる一八名の仲間を奪還しようとの訴えがなされた。

「管制塔裁判を勝利させる会」からは、管制塔公判の現状が報告され、花尻裁判長の月三回指定―超拙速裁判を粉砕するたたかいは一定勝利的に進んでいるが、この秋が正念場であること、また、一年六ヵ月も不当な長期勾留をしいられている管制塔戦士を年内奪還するため全力で保釈要求署名運動を行うことが提起された。

反処分のたたかいでは、全逓、電通、自治体、国鉄、民間のたたかいの報告がなされたが、中でも大阪の内外電機で三里塚首切りを撤回させた小林君の報告には、ひときわ大きな拍手が参加者から寄せられた。

集会では、家族会の代表の、共に裁判の勝利をめざしてたたかうという決意を最後に全員で確認し、中央諸官庁にたいする行動にうつった。

東京地裁では構内に機動隊が配置され、ものものしい警備体制がしかれている中、抗議団は面会申入れ書を職員に手渡し、面会を要求した。これにたいし裁判所は「裁判長は会わないと言っている」と拒否し、「代表二名にすれば書記官が会う」と対応してきた。抗議団は全員の参加を要求したが、裁判所は受け入れず、書記官との面会も実現されなかった。

国鉄南管理局では、応対に出た職員が興奮して話も出来ず、抗議団がなだめる一幕もあったが、この二ヵ所以外の郵政省、文部省、法務省、電々公社ではシャッターをおろし、警備員を配置して守りをかため、申入れ書すらも受けとらなかった。

各省庁への抗議行動を終えた部隊は、午後四時都庁前に総結集して構内集会を開き、三・二六の闘いで不当な解雇をうけた飯島・乙坂さんがマイクをにぎって都庁職員に不当処分の撤回を訴えた。

その後全員で東京駅に向い、北口でその日の総括集会をひらき、今後さらにたたかいをもりあげていくことを確認して解散した。

九・一七中央行動は、これまでの開港阻止決戦の裁判闘争・処分撤回闘争の一大集約として、秋に向けた大きなステップをつくり出した。この中で明らかにされた全三里塚被告の即時釈放の闘いは、この秋三里塚裁判闘争における重要な課題である。九・一七闘争の成果をひきつぎ、いまだ不当勾留を強制されている獄中の管制塔被告奪還のため、圧倒的な署名運動を展開しよう！

全国の同志・友人諸君！

昨年五・二〇強行開港という既成事実を覆えすかつてない闘争への橋頭堡はかくして築かれた。

われわれは、九・一六闘争を、第一に「対話」攻撃と対決する反対同盟の決意をうけ、廃港決戦の第一弾として闘いぬいた。第二に、木の根用水建設の成果にふまえ、革命の拠点三里塚を全人民の力で守りぬくべく決起した。第三に、管制塔戦士年内奪還めざし、保釈金カンパ、保釈要求署名運動の突破口として打ちぬいたのである。

更に、今秋、団結小屋増改築、援農をやりぬき、反対同盟の集会宣言に応え廃港決戦勝利をめざして、断固として進撃しよう！

# 我らが大地に大義の旗を

## ―9・16大会宣言（見出しは編集局）―

十四年の修羅場をかいくぐってきた我ら反対同盟は、いくたびの正念場、いくたびの決戦を倍する総力をもって、必ずや空港粉砕を実行する。

敵の対話攻撃なる窮余の策略をふみやぶり、十四年間の闘いの蓄積に立脚し、十四年間の喜怒哀楽をひとつの石とし、呼吸を整え、怒濤のごとく現空港をのみつくす。

ここ数ヵ月、反対同盟の葛藤は我らの闘いにとって、新たな活力をうみだす希少な時であった。七転八起、我らは同じ轍を二度と踏まない。稲刈り半ばで、今日ここに結集した我らの全身に新たなる自信がある。

敷地内十五戸の硬骨漢は、開墾・開拓でふるったとんび鍬の柄をすげ替えて、己れの未来を開拓する。このとんび鍬の刃先の前で、二期着工は風前のともしびである。

反対同盟、全国の人民が渾然一体となって、現空港を攻撃し抜くことが、二期工事を阻止し、三里塚空港を葬る最良の戦いである。

既成事実は覆せないとの通念を、我らが体内から取り払わなくて、我々は一体、何を、如何なる勝利を獲得することが出来るだろうか。

我ら反対同盟は、現空港に対する攻撃を更に強化する。連月連日、執拗に起こしていく決意を固めた。

全国の闘う人民との共同戦線で、飛行を阻止し、鉄条網をのりこえ、我らが大地に堂々と、我らが取香に、古込に、我らが駒井野に、天浪に大義をたててなだれこむ。

闘う心組を固め、闘いの根をのびのびとのばし、第二、第三の戦う農業を確立し、反対同盟の生活・生産・闘争にわたる団結の質を高めていくことは、闘いの力を生みだす土壌である。我らは更に構想を練りあげ、農振策・成田用水攻撃を骨ぬきにしていく。

敵を目前にまで追い詰め、今一歩のこの時に何もたじろぐことはない。動労千葉と固く連帯し、空港粉砕の志気を高め、完全勝利をめざすのみである。

三里塚から渡る橋、三里塚へ渡る橋、その橋げたの基礎を固め、九・一六を突破口に連月連日の攻撃に打って出よう。

本大会に結集した総ての皆さん方に以下四項目を提案し、全国的な討論を呼びかける。

一、騒音直下で闘う岩山地区反対同盟との連帯をより深めるため、家屋防音を始めとする具体的な作業を通し、闘いの場の確立をはかる。

二、戦う農業を同盟全域に広め権力の成田用水をはじめとする切り崩し策動をはねのける。

三、一年間の連続的飛行阻止闘争を通し既成事実の息の根をとめる。

四、政府中枢の空港対策を、具体的行動を通して粉砕する。

以上をもって大会宣言とする。

一九七九年九月一六日

三里塚芝山連合空港反対同盟

## 9・16ひきつぎ、同志奪還・処分撤回の各省庁行動をうち抜く（9・17 都庁前）

### 公判スケジュール

10月3日　二月要塞、午後1時、千葉地裁
5日　八ゲート3G、午前10時、東京地裁
8日　五・二〇2G、午後1時、東京地裁
11日　三月要塞1G、午後1時、千葉地裁
15日　管制塔G、午前10時、東京地裁（月三回期日指定のもの）
22日　三月要塞2・3G、午前10時、千葉地裁
25日　管制塔G、午前10時、東京地裁（月三回期日指定のもの）
31日　八ゲート2G、午前10時、東京地裁
同日　五・二〇3G、午前10時、東京地裁

# 9・17 全国家族交流会

## 「空港廃港に追いこむため一刻も早く保釈を」

九月一七日、前日の闘争に続き全国家族会の交流会が三里塚現地でもたれた。管制塔被告の水野さん両親、津田さん、中川さん、河西さん、八ゲートグループの乙坂さん、吉田さん、横堀グループの高野さん、八ゲート退却の岡田さん、二月要塞の新井さん、反対同盟から秋葉さん、堀越さん、長谷川タケさん、田下さん、笹川巳三夫さんが参加した。

数台の車に分乗し現地を見学する。木の根用水、八・九ゲート、横堀要　へと回り、反対同盟の説明に一つ一つムスコ、ムスメ達の闘いの正当性をつかみとる。途中、機動隊の横暴な検問にあうが、「荷物なんか見せる必要ありません！あなた方のよっぽどまちがっている！」（乙坂さん）と反撃する。最後に東山薫氏の墓まいりをし、墓標に全国家族会のタスキがかけられる。「家族会ががんばっているんでカオルもきっと喜んでいますよ」（長谷川タケさん）

午後交流会がなごやかに持たれた。

「ムスコ、ムスメのたたかいでこの年になってやっと世の中なんであるか見えてきた。東山さんの無念を思うと涙が出てくる。ムスメと共に残る人生すべてを闘いにかけようと思う。」（乙坂さん）「水野さんの全国行脚、自分達ももっとがんばらねばと思った」（吉田さん）。また、「ムスコは獄中でどんなに長くてもがんばるといっている。私もそういう意味で保釈はあんまり考えていなかったが、今は再びみなさんと共に闘わせ、空港廃港に追いこむため一刻も早く保釈をかちとらねばと思う」（水野さん）と、管制塔戦士年内奪還にむけたいきごみを語る。

最後に堀越さんから「家族は保釈まではがんばるが、そこから先はとかく当人まかせになってしまう。それをうち破ってゆかねばならない」と問題提起がなされ、今後ももっと多く、深く交流していくことを確認した。

こうして九・一七交流会は管制塔水野さんの闘いを先頭に、闘う家族会への前進の一歩としてかちとられた。家族会の闘いと共に管制塔戦士年内奪還・裁判闘争勝利・空港廃港へ前進しよう！

## 三里塚農民との連帯の拠点を更にうち固めよう！

# 団結小屋の増改築に人力・物資・資金の結集を！

全国の同志・友人のみなさん。

われわれ戦旗派は、このたび、現地三里塚団結小屋の増改築に取組むことを決定いたしました。

九・一六闘争にみられる闘いの再高揚は、三里塚が、いま、再び決戦期を迎えたことを告げ知らせています。

反対同盟はこの闘いの中で、日帝大平の「対話」攻撃と、四千五百億円にのぼる二期工事予算の公表とまっこうから対決する集会宣言を満天下に明らかにしました。

連日の現地実力闘争、対運輸省抗議行動、騒音地区対策、闘う農業推進をぶちあげたこの集会宣言こそ、二期工事阻止・廃港決戦への戦闘宣言に他なりません。

われわれは、あらゆる欺瞞・ペテン・蹂りんの鉄鎖を断ち切り、たちあがる三里塚農民とあくまでも連帯し、決戦期を迎えた三里塚闘争に今こそ全党・全人民の総力をあげた決起で応えてゆくのでなければなりません。

二期工事阻止・廃港決戦の戦闘体制を構築するにあたって、団結小屋の増改築は不可欠なものと言わざるをえません。全国の同志・友人の力を結集して戦いとろうではありませんか。

団結小屋建設に臨むにあたって重要なことは、第一に、あくまで三里塚農民に依拠し、永続的に闘いぬける連帯の内実を打ち固めるべく決起することです。

反対同盟農民は、暫定開港の既成事実化の重圧や、一日百五十便にのぼるジャンボ機の大轟音による騒音地獄の現出を武器とした、敵権力の用地内・岩山部落への悪らつな買収工作、そして「農振計画」・成田用水、「対話」攻撃による用地内外の分断と反対同盟解体策動の下にあって、なお歯をくいしばって闘い続けており、更に、新たな戦闘宣言を発しています。今こそ敵の攻撃を反対同盟と共に受けとめ、心を一にしてはね返す、そうした連帯の内実と実践をつくりだしていくことが、われわれに問われているのです。

団結小屋建設に決起し、三里塚の地に、更に深く根づく槌を打ちふるおうではありませんか。

その第二は、成田治安法弾圧と対決しつつかちとらねばならないことです。

三里塚空港暫定開港後、権力は、反対同盟には「話し合い」を、そして支援勢力には、成田治安立法に象徴されるがごとき徹底した暴力的弾圧で臨み、分断をもくろんできました。

まったく許されざることではありますが、機動隊の支援勢力に対するテロ・リンチが日常化しております。こうした弾圧と徹底対決することぬきに、今回の事業も完遂することはできません。

権力弾圧と実力対峙し、三里塚廃港決戦を闘う決意を固めるものとして、団結小屋建設に起ちあがろうではありませんか。

二期工事阻止、廃港戦取へ向けた団結小屋増改築のため、人力・物資・資金の圧倒的結集を全国の同志・友人の皆さんに訴えるものです。

**共産主義者同盟（戦旗派）**
**三里塚現闘団**

# 四ッ谷の年内棄却策動を打ち破り 10・31再審決戦に勝利せよ！

狭山全国実行委

全国の同志諸君！ 闘う仲間の皆さん！

狭山再審決戦は、一〇月一〇日の検察側意見書提出期限切れを前にして極めて重大な局面に突入している。われわれは、一〇・三一闘争に全国から総決起し、再審決戦の一大頂点として闘いぬこうではないか。

五月に弁護団によって提出された新証拠は、石川氏の無実を反論の余地なく明らかにしている。従来「四月二八日」とされてきた脅迫状訂正前の日付が「四月二九日」であることが証明され、警察による石川氏へのニセの自白強要が満天下に示されたのである。しかし、この間、一貫してシロをクロと言いくるめ、早期再審棄却をもくろんできた検察側が、新証拠に対して「石川氏＝ウソツキ」という許しがたい差別意見書攻撃をかけてくることは充分に予想されるのである。そして、高裁四ッ谷は、検察側意見書提出後、弁護側に対しても求意見を行ない、その期限は前例にならうと言っているわけだがあの8・9抜きうち的上告棄却のやり口を見るならば、10・10以降いつ抜きうち的再審棄却がなされるかわからないという緊迫した情勢にあることをふまえなければならない。

従ってわれわれは、10・31闘争を第一に検察側差別意見書攻撃をうち破り、高裁四ッ谷の年内棄却を絶対阻止すべく闘い抜くのでなければならない。

更に第二に、部落大衆の同盟休校、狭山ストの闘いに応え、石川氏獄死攻撃を許さず、完全無罪・即時奪還をかちとるべく決起しなければならない。

部落解放同盟は10・31闘争に向けて、すわり込み闘争、10・30全国一斉ゼッケン登校闘争を決定し更に同盟休校や狭山ストをもって再審決戦の血路を自らの主体的闘いによって切りひらこうとしている。七七年八・九上告棄却以降の厳しい情勢の中で、われわれを含む狭山を闘う支援勢力の取り組みの不充分性が生み出されつつも、部落大衆は「自立自闘」の闘いをもって完全勝利まで闘いぬく決意をうち固めてきたのである。5・23闘争に向けた数寄屋橋での一週間のすわり込み闘争、5・23から8・9に向けた七九日間の全国行進、同盟登校の闘い、更に、5・23集会や8・9集会に示された部落大衆の全国からの圧倒的結集はそのことをはっきりと物語っている。

われわれ全国実行委は部落大衆のかかる「自立自闘」の闘いに学び、取り組みの不充分さをとらえ返し、狭山再審の実現に一歩でも肉迫すべく、5・23～8・9の過程を全身全霊をかけて闘いぬいてきた。

東京におけるすわり込み連帯行動や東京高裁に対する狭山デーの闘い、狭山現地における石川氏御両親をはじめとする狭山支部との連帯した闘い、名古屋における子供会の闘いやハンスト決行など、全国各地で、職場で、学園で広範な大衆決起をつくり出すべく奮闘してきたのである。いま、10・31を前にして、これらの成果にふまえた更なる前進が問われている。実行委運動の豊かな展開をめざし、決戦勝利に向けた決意と体制をつくり出しながら、10・31総決起を何としても実現しようではないか。

われわれは10・31を闘うにあたって石川氏の奪還を固く心に誓わなければならない。獄中一七年目の生活を強いられている石川氏は、一刻も早く獄から解放されることを願いつつも、自らは狭山闘争の完全勝利の中で奪還される以外にないんだと、狭山再審闘争の方向を血を吐くような思いで訴えている。三〇〇万部落大衆の解放を自らの双肩に担って闘いぬく石川氏に何としても応えようではないか。石川氏の苦闘に応え、石川氏の帰る日を心待ちにして闘い続けている年老いた御両親に応えるためにも、決意を新たにし狭山完全勝利に向けて闘おうではないか。

第三に、われわれは日帝大平の大衆収奪・闘争破壊を通じた戦争への国民動員と対決し、部落大衆と連帯して闘いぬくのでなければならない。

今春、日帝大平が多くの人民の反対を押し切って強行した元号法制化は、部落差別をはじめとする差別分断支配を強化し、排外主義国民動員を通じて戦争へと国民を動員せんとする攻撃である。今秋、日帝大平は解散・総選挙を通じ、長期安定政権を実現しようともくろんでいる。そして、その下で反動的・反人民的政策を八〇年代にわたって強力におし進めようとしているのである。防衛二法改悪や有事立法・五次防という戦争策動と並行して、狭山闘争や三里塚闘争に対する闘争破壊が全体重をかけて行なわれ、更に労働争議に対する刑事弾圧や4・20文部省通達を通じた学生弾圧が恒常化しているのである。われわれは差別の強化と闘争破壊を通じた日帝大平の戦争策動を絶対に粉砕しなければならない。

更に、日帝大平は帝国主義としての延命をかけて産業構造の転換をなし、部落産業をはじめとする軽工業の切り捨てと原子力・コンピューター・航空宇宙産業の育成を強権的に行なおうとしている。しかも、この産業構造の転換を徹底した大衆収奪によってなさんとしているのである。「不平等税」たる一般消費税の導入策動、そして中低所得者を対象とした増税など一切の犠牲が部落大衆をはじめとする最下層の人民に転嫁されようとしているのである。日帝大平の攻撃を一身に浴びながらも完全解放に向けて起ちあがる部落大衆と徹底連帯し、戦争と差別への道をうち破るべく10・31に総決起しようではないか。

全ての同志諸君！闘う仲間の皆さん！

東京高裁は8・9闘争における部落大衆の高裁包囲・糾弾闘争に恐れをなし、毎月狭山デーの高裁抗議行動において、書記官・調査官への要請文手渡しを拒否するという反人民的差別的対応を強めている。しかしこのことは逆に高裁四ッ谷が人民の闘いを最も恐れていることの表現に他ならない。東京高裁を包囲する全人民の戦列を更に更に強化しよう。これこそが高裁四ッ谷に再審を開始させる唯一の道である。再審要求の署名を、ハガキを高裁四ッ谷に対する紙の弾丸としてたたき込もう。一人でも多くの力と意志を結集し、再審棄却絶対阻止の巨万の人民決起を10・31に何としても実現しようではないか。

われわれ全国実委は、微力ではあるが持てる力の全てをふりしぼってその一端を担って闘いぬく決意です。全国実委の旗のもと、どのような困難をも恐れずたたかいぬいている石川一雄氏の敢闘精神に学び、ともに10・31に向けて奮闘しよう！

石川氏奪還・再審要求かかげ、たたかいぬいた行進隊（8．9日比谷野音）

## 10.31 狭山中央闘争

明治公園

## 寺尾判決五ヵ年糾弾！再審勝利！

# 金景淑虐殺糾弾！朝鮮出兵阻止！

# 朝の暗黒支配を突き破り決起する韓国民衆に応え、日帝の韓国支配の野望をうち砕け！

YH貿易女工金景淑（キム・ギョンスギ）さん虐殺への憤怒は、韓国全土をおおい、朝体制を未曾有の危機に陥し入れている。朝を倒し日米帝を追い出して南北統一への道を切りひらくのか、それとも朝体制のいっそうの暴虐と分断固定化か、韓国情勢は八〇年代へむかって新たな段階を画そうとしているのである。

七八年以後急速に顕在化してきた韓国の経済危機は、七九年に入って決定的となってきた。止どまるところを知らないインフレーションの進行は、第二次石油値上げのあおりをうけて、脆弱な韓国経済を直撃し、朝政権の「高度成長」政策を打ち砕いてしまった。

YH貿易女子労働者の決起は、帝国主義と朝カイライ政権によって生活を破壊され、もはや立ちあがることによってしか自己の生をまっとうすることができない韓国労働者のぎりぎりの決起としてあった。それゆえに、女子労働者の決起は今、全韓国の労働者・農民、そして民主化闘争をたたかう人民の共感と支援をうけ反朝反日闘争へと突き進まんとしている。

そして朝政権のこれへの回答が、金景淑さん虐殺、野党新民党・新聞記者・キリスト者を含めた広範な反朝勢力への無差別弾圧であった。

しかもわれわれが注目しなければならないことは、このような朝政権の決定的な危機の進行の中で、カーター訪韓、山下防衛庁長官の訪韓による安保―日「韓」体制の急速な強化である。

あらん限りの暴虐な弾圧によって民衆をおさえこみ、帝国主義の搾取、収奪のえじきとして韓国民衆をさらしながら自己の政治的延命をはかってきた朝に対して、山下訪韓をつうじて日帝はより積極的に護持を打ち出してきたのである。

もはや出口を失い崩壊の危機に立たされた朝政権に対して、残された道は、帝国主義者どもによる朝鮮出兵策動と暴力的人民抑圧以外にない。戦前の日帝植民地支配を上まわるという朝のファッショ人民支配に抗し、英雄的なたたかいをいどむ韓国民衆の決起、血叫びに対して、われわれ日本の人民はいかに応えぬくのか。10・20反戦集会を打ちぬくにあたり、このことがわれわれに決定的に問われているのだ。

# 「高度成長」の破産と崩壊する朝独裁支配

激動する韓国情勢において、われわれが確認しておかなければならない第一の点は、七九年に入って爆発した韓国経済の危機が、朝体制の支配の基盤を根底的に掘り崩し、出口のない破局を生みだしているということである。

六二年から始まった第一次五カ年計画では実質八・五％、六七年からの第二次五カ年計画では一〇・五％、そして七二年からの第三次五カ年計画では、オイル・ショックとそれによる経済不況の中にあっても七六年五・二％、七七年一〇％という高度経済成長をつくりだしてきた。こうした一定の高成長維持の下で、朝は一切の反朝闘争を圧殺し、帝国主義者の進出と自己の支配を正当化してきた。また、日本のブルジョアジーからは「韓国脅威」論、「日韓経済戦争」論が喧伝され、「先進国への仲間入り」が語られはじめた。

しかしながら、昨年後半から顕在化したインフレの高まりと輸出不振、そして今年に入ってからの再度の石油値上げは、韓国経済を直撃し、猛烈な不況とインフレと不況を生み出した。その経済的矛盾は一挙に爆発し、帝国主義に従属した借款経済と低賃金労働によってつくりだされた「高度成長」の破産が明らかとなったのである。

## 高度成長の破産と増大する借款

今年一月一九日、朝は年頭記者会見において「安定基盤構築、持続的な経済成長推進による自立経済達成」を表明し、これをうけて一月二四日に六カ経済部署長官が次のような施策を発表した。

すなわち、国民生活の安定、物価構造の正常化、賃金上昇の適正化、そして通貨管理の適正化を重点目標としてかかげ、経済成長率九％（七六年以来最低）、卸売物価一〇％、消費者物価一二％、輸出目標百五十億ドルをうちだした。この国民生活の〝安定〟の強調じたい、国民生活の破局的事態を言外に認めるものであり、同時に「高度成長」の破産を認めるものとしてあった。うっ積する民衆の不満を何としても押しとどめようとするものである。

しかし、この経済政策も半年もたたないうちに崩壊してしまった。

七月に入って、石油の工場渡価格（平均五九％）、四二の工産品（最高四八％）、電気料金（平均三五％）の大巾引き上げをやらざるをえなくなったのである。そしてこの値上げ発表と同時に下半期の経済見通しを次のように発表した。

すなわち、①GNP成長率は九％から八％に切り下げる、②卸売物価二四～二五％、消費者物価は二一～二二％に抑制する、③金融の緊縮化、④輸出目標は百五十五億ドルを百五十一億ドルに引き下げ、輸入は百八十五億ドルを百八十九億ドルに引き上げ、貿易赤字は三十五億ドルから三十八億ドルに拡大、⑤国際収支赤字の穴埋めに三十九億ドルの借款を導入する。

このような韓国経済の破綻の直接的原因は、「高度成長」を実現してきた輸出主導型経済の完全な行き詰まりである。

二度の石油値上げによって、①輸入原資材の価格が暴騰、②先進国の輸入規制の強化、③国内インフレの深化、④金融引締めによる資金難、⑤輸出価格競争力の弱化、等々がもたらされた。

この輸出力の減退は、韓国経済の屋台骨を直撃する。加工貿易を中心とする輸出経済にたよる韓国では、もともと国内資本の乏しい中にあって、資本は外国資本（主に米・日）によってまかなわれ、外国産のプラントと技術を導入し、原材料を低賃金労働力をもって加工し、これを国内向けではなく、もっぱら輸出にふりむけるという生産構造になっている。たとえば韓国の貿易依存度をみてみると、一九七六年を例にとれば六六％で、日本の二〇％前後と比較してみても、いかに極端に輸出経済にたよっているかがわかる。石油値上げの影響を日本よりはるかにうけやすいのは当然である。

実際のところ、今年の上半期の輸出は、六十七億七千六百万ドルで目標に一・六％未達成。下半期は石油五九％値上げという事態の中で、輸出コストが上昇し、より打撃をうけるのは必定といわねばならない（韓国では石油の使用は、民生用八％、産業用九〇％以上といわれている）。

しかも輸出を上回る輸入の増大という悪循環はますます拡大されている。七月末現在の貿易赤字が約三十三億ドルで、これは昨年の二十三億五千万ドルを十億ドルも超過しており、年末までには四十～五十億ドルになると予想される。わけても対日貿易赤字はこのうちの六〇～七〇％を占めており、七九年三月末までで累積赤字百三十五億七千七百万ドルにもなっている。

輸出産業の保有設備の約半数と石油をのぞ

く原資材の輸入の四六%を日帝が占め、海外市場の販路を日帝商社がにぎり、韓国労働者を低賃金労働で使って利潤を独占するという日帝の韓国経済の支配の構造がここにはっきりと示されている。まさに朴にとっては、輸出に拍車をかければかけるほど、労働者に低賃金労働を強い、日帝をはじめとして輸入を増やし、赤字を拡大せざるをえないという構造におちこむのであり、その結果として借款を雪だるま式に増大せざるをえなくなっているのである。

こうして帝国主義の新植民地主義支配の下に組みこまれた韓国経済のかかえる対外債務残高は百四億六千万ドル（五九年から今年五月末まで）にものぼっている。このうち、今年五月までの借款導入総額は到着基準で百三十三億千九百万ドル（確定基準で百八十二億ドル）で、償還されたのは二十八億五千九百万ドルにすぎないのだ。しかも短期負債が四九・五%を占めており、利子負担の圧力は借金返済のために借金するという悪循環を生み出しているのだ。

こうした、借金を返すための借金、輸出拡大のための輸入の増大→赤字の累積、それに加えて負債を必要としない直接投資の導入をめざした馬山に代表される輸出自由地域の設置、外貨獲得にむけた労働力の海外輸出、キーセン観光など、朴の「高度成長」とは、徹底した韓国民衆の犠牲の上につくられたものであり、日帝をはじめとした帝国主義の韓国支配と利潤の獲得に徹底して道を開くものでしかないのだ。

### 倒産・失業の拡大と激発する労働闘争

高度成長政策の破綻にともない、不況による企業倒産が広がり失業が増大し、インフレが爆発するというスタグフレーションに韓国経済はみまわれ、労働闘争が激発している。七三年の石油危機に際して日帝は、猛烈な輸出攻勢でのりきってきた。これに対し韓国では、輸出産業が国内経済とは無関係に別の循環構造をもっているため、石油値上げの影響が輸出産業に波及したのみであったこと、この輸出産業にあっても、朴による輸出金融などによる手あつい保護によってもち直したこと、またドルの下落による円高が、当初韓国商品と競合関係にあった日本商品の競争力を低下させたことによってもちこたえ、なお輸出主導による高成長を維持しえた。それにとどまらず、外貨獲得の手段として、海外建設用役＝労働力の輸出を中東にむけて積極的におこない、これが少なからず韓国経済の収支をおぎなってきたのである。

しかしその後次第にインフレ圧力は高まってきた。国内における各種建築資材、セメント、そして地価が高騰しはじめ、そして輸出にともなう需要から通貨が七六年三〇%増、七七年四〇%増として増発され、地価の上昇に拍車をかけた。こうして原資材の価格三五・三%増、賃金三・二%増が昨年あたりからはじまり、輸出コスト増→輸出不振をまねいてきた。

朴はインフレの拡大が、ただでさえ低賃金を強いられている韓国民衆の生活を破壊し、不満が爆発することを恐れ、昨年六月、金融引締めによってインフレの抑制をはかろうとした。この引締めにより中小企業はもちろん大企業までが深刻な資金難に直面し、倒産・休業が一気に拡大した。そして、賃金遅配、首切りの嵐が韓国労働者をおそい、インフレとの二重の生活破壊が急速にはじまったのである。

昨年一〇月、制世産業が七億ウォンの不渡りを出したのに続き、今年の二月には、新興財閥として知られる栗山グループが千六百二十億ウォンの負債を残して倒産し、八千百人からなる労働者が路頭になげだされた。また最大財閥の一つ現代グループに属する現代洋行が六・七月に不渡りを出し、実質的倒産状態に陥り、救済措置をとらざるをえない所にまで至っている。その後も、源進レーヨン、韓国生糸グループ大韓電線ととどまるところを知らず、たまりかねた朴政権は、六月に入って輸出産業に対する金融引締めを白紙にもどし、無制限の金融支援措置をとり、この崩壊をくいとめるために必死になっている。

政府援助のない中小企業にいたっては更に深刻で、五月末現在で一万四千八百余社のうち、休廃業したのが三千四百社にも達している。

この不況と、二〇～三〇%というインフレの激化の中で、労働者は集中的な犠牲を強いられている。

ただでさえ低賃金で苦しめられている韓国の労働者にとって、この韓国経済の破綻は致命的である。「ここをやめて他に就職しようとしても、引き続く物価上昇により、失業者たちが日毎に増えて」「職をさがすこともできない」（金景淑さんのオモニにあてた手紙）ギリギリの状態の中で、労働者は、この耐えがたい生活苦を打ち破るために決起する以外にないところにまでいたっている。

YH貿易女性労働者のろう城闘争は、国家保衛法、緊急措置九号というファッショ体制の下で〝許されうる〟ギリギリの闘いだったのである。しかも、朴の回答は、二百人の女性に対し、二千の武装機動隊のテロルであり、金景淑さん虐殺だったのだ。

七〇年代を通じて追求された「高度成長」の夢が根底的崩壊局面をみせ、朴の支配の基盤をほりくずしていること、このことは単なる経済危機としてあるのではなく、「経済成長」の名の下に、すべての韓国民衆の反朴闘争を抑圧し、「北を追いこし」「先進国に近づく」という幻想をふりまいて、帝国主義とカイライどもの人民搾取、収奪を覆いかくしていた朴体制そのものの崩壊を意味している。

経済成長のどん詰まりの中で、朴はこれまで以上の暴力支配によってしか自己の延命をはかることはできない。韓国民衆にとって、これまでの支配のもとではもはや生活を維持しえないところにいたっている。労働者のギリギリの決起は最初から反朴闘争として、政治的闘いとしての性格をもたざるをえない。

まさしく韓国経済の危機は、朴体制の危機としてあり、韓国民衆の内乱的決起へと突き進む火薬庫となっているのだ。われわれは、この韓国経済危機―朴体制の根底的崩壊の危機をみすえ、英雄的な韓国労働者の決死の決起に応えぬく決意を打ち固めねばならない。

機動隊の武装乱入に抗してYH貿易女子労働者は最後まで闘いぬいた（八・一二、新民党本部前）

## 朴体制護持を狙う日米「韓」軍事一体化策動を絶対に許すな！

韓国経済の崩壊と、労働者人民の決起、反朴民主化闘争の広範な拡大は、朴の独裁支配の瓦壊を生みだしているだけではない。この朴を背後でささえ、アジアにおける侵略反革命の拠点として韓国をうちすえんとしてきた日・米帝国主義者どもにとって重大な危機をもつくりだしているのである。

韓国情勢において、われわれが確認しておかなければならない第二の点は、日米帝国主義が朝鮮出兵をもって韓国民衆、朝鮮人民を弾圧し、朴の徹底護持を貫ぬくべく急速に戦争準備をおし進めていることである。

朴が人民を支配するに血の弾圧をもってする以外ないように、帝国主義者にとって、とりわけ日帝にとって、延命の環となっている朝鮮侵略反革命を最後的に保障するものは戦争による人民の抑圧以外ない。六月末のカーター訪韓―在韓米軍の撤退中止と、七月末の山下防衛庁長官の訪韓は、朴の護持と朝鮮出兵態勢への突入という反革命的もくろみを露

骨に宣言したものに他ならない。

### 反革命まき返しを狙う在韓米軍撤退の中止

カーター政権は、一九七六年の大統領選以来、人権外交と在韓米地上軍の撤退を公約としてかかげてきた。ベトナム戦争での敗北、カイライ政権とのゆ着に対する米国民の不満・怒りの拡大という中で、国内世論の統一をはかることを目的にカーターは登場したのである。従ってカーターにとって韓国問題は避けて通ることのできないものであった。ところがその結果は、韓国民衆の激しい反対を無視して行われた訪韓と在韓米地上軍の撤退中止として、公約を一八〇度転倒したものとなったのである。

米韓共同声明において、カーターは「韓国の平和と安定を維持し、経済・社会を引き続き発展させるための政府の努力を支持」すると保証し、昨年十一月の米韓連合司令部設置が「共同防衛協力面での効率性を高めた点」を確認、核のカサと韓国防衛力の強化のための兵器・技術の援助を約束したのである。

カーターは訪韓を終えた後、在韓米地上軍の撤退凍結を発表し、その理由として米情報部の調査分析結果なるものを公表して次のように述べた。すなわち、①北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）が従来の推定を相当うわまわる軍事力の増強を行っていることが明確になった、②極東におけるソ連軍の増強とインドシナの紛争に象徴される東南アジアの不安定な情勢も考慮された。

しかしこの「北」の軍備の増強などは口実にすぎない。軍事情勢の変化は、反革命まき返し戦略としてうち出された米帝戦略そのものの中にあるのだ。イラン革命の勃発、眼前に迫るニカラグア革命の進行に対し、後退しつづける米帝世界戦略を反動的にまき返していくものとして、朴の護持、米韓軍事体制の強化、南北分断―固定化がめざされたのである。

一方、日帝の米軍撤退方針に対する態度は当初より徹底した朴擁護に貫かれている。米軍の撤退はすなわち米帝が朴を見限ることを意味し、朴の強調してやまない「北の脅威」なる、独裁体制を正当化するための根拠そのものが空洞化されかねないのである。このことに日帝は朴以上の危機感をもったのである。

従ってカーターが大統領に当選した直後から「朝鮮半島については南北の共存が現段階における唯一の現実的な選択である。韓国における米軍の存在は、この半島の不安定な均衡を破壊しないための安全装置である」（七六・一一・九、東郷駐米大使）と述べ、南北分断固定化と米軍の韓国駐留を日帝の要求としてきたのである。また七七年春の福田・カーター会談において、日帝は、「朝鮮半島の平和と安全は北東アジア地域の安保に重要」なる新たな「韓国条項」を確認するとともに、①朝鮮の平和統一は不可能との判断から、当面「平和共存」すなわち南北の固定化とバランスの維持をはかる、②撤退計画は「削減」計画として行うべきこと、③人権問題について、朴政権を公然と非難したり政策転換を要求することは避けるべきだ、なる主張をなしてきた。

このような日帝の主張、働きかけが、朴に大きな満足を与えていると同時に、カーターの国内世論向けの口実に有効な働きをしていることを見のがしてはならない。

日米韓の軍事的結合を強化することを確認した米帝は、撤退中止宣言に先だち、十億ドルにのぼる対韓軍事援助を決定し、地対地ミサイル・ランス（核搭載可能）の持ちこみ、韓国・太平洋地域への戦闘機等航空機の増強を行った。そして昨年のチーム・スピリット78作戦を上まわる十八万の米韓軍を投入した史上最大の米韓合同演習―チーム・スピリット79作戦を強行して、この「宣言」づくりの下地を作っていったのである。

### 八〇年代軍事体制の構築めざす山下訪韓

このカーター訪韓と撤退中止に呼応して、日帝は戦後はじめてという防衛庁長官の訪韓を行い、朝鮮出兵にむけた日帝の決意を米・韓支配者に示したのである。

商業新聞においても「わが国安全保障上、〝最後のタブー〟を破るもの」「実際上〝日韓米の三者協力〟の体制が浮き彫りになる」と言われている。この半年間をみても日韓軍事交流は飛躍的に拡大している。江崎・中曾根・坂田・金丸と歴代防衛庁長官であった自民党実力者の訪韓、金鍾煥韓国合同参謀本部議長の来日―山下との会談、永野陸上幕僚長の訪韓、そして日韓議員安保協議会の発足など、これまでにもまして公然たる日韓軍事一体化の道が着々と進められている。その頂点たる山下訪韓は、日帝大平が朝鮮出兵へむけた準備を公然となしきることを満天下に表明したものに他ならない。

元在韓防衛駐在官の塚本勝一が「わが国は、ソ連のような超軍事大国と戦争するようなことは考えられないので、わが国に波及する紛争は朝鮮半島により大きく関連していることになる」（『朝鮮半島と日本の安全保障』）と述べているように、日帝は朝鮮半島にむけた戦争準備を強化しているのだ。

そして朝鮮半島における危機とは、朴政権の崩壊、すなわち反朴反帝闘争の勝利と、南北の統一という朝鮮民族解放のたたかいである。暗黒の独裁政治の打倒と南北の革命的統一こそが、日帝のこれまで作りあげてきた新植民地主義的支配、人民収奪を不可能にさせ、莫大な利権の一切を無にするものであり、アジア侵略反革命の足がかりを粉々にするものなのだ。だからこそ日帝のこの間の戦争体制構築にむけた人民動員と社会再編の強行、安保―日韓体制の急激な拡張は、全面的危機をむかえた朴体制を徹底護持しぬき、韓国民衆の血の犠牲の上に必死で延命をはからんとする日帝大平のもくろみとして見抜かねばならない。こうした帝国主義の野望は、何ら展望をもったものとしてあるのではない。おし止めることのできない韓国民衆の決起につき動かされ、「高度成長」の破綻により人民支配の方策を失った朴政権を、唯一軍事的に支えぬくことによってしか帝国主義的延命の道はなくなっている。パーレビやソモサがそうであったように、朴の日帝の運命共同体的結合は、韓国民衆、朝鮮人民、そしてわが日帝足下人民の猛然たる決起によってたたきつぶされる以外にないのだ。

今秋期政治決戦の真ただ中で、われわれはこのことをがっちりと胸に刻みこみ、朝鮮人民への日本プロレタリア人民の血債にかけたたたかいの決定的重要性を何度も確認し、朝鮮出兵阻止にむけた全人民のたたかいを創出してゆかねばならない。

## 維新体制打倒へ猛然と突き進む
## 韓国民衆に徹底連帯しぬけ！

韓国情勢において、第三にわれわれがつかみとらねばならないことは、崩壊の危機に頻しますます凶暴化する朴の弾圧をはねのけ、陸続たる民衆決起がかちとられていることであり、もはや妥協を許さない反朴闘争の嵐が全社会的に吹き荒れて、決定的局面を迎えつつあることである。

### YH貿易女子労働者の決起と朴の暴虐

今年八月十一日、解雇撤回を要求してたち上った女子労働者の一人が朴の凶暴なテロルによって虐殺された。このYH貿易女子労働者のたたかいと朴の残忍な弾圧は、現在の韓国労働者の状態と朴の本質をはっきりと示している。それゆえにこそ、金景淑（キム・ギョンスギ）虐殺は、今や韓国労働者の激しい怒りを呼びおこし、朴打倒の叫びが全人民のスローガンとなり、おさえがたい人民の総反撃が次々とまきおこっている。

YH貿易経営者の一方的な廃業通告と全員解雇によって生活の道を断たれた女子労働者が、これに抗議して寄宿舎でろう城ストを行っていた。しかしことを追い出されたため約二〇〇名が去る八月九日からソウル市の新民党本部に場所を移して請願のすわり込みを続けていた。

ところが、三日目の十一日午前二時ごろ、ソウル市警が「すわり込みをやめねば強制解散させる」と通告、二千人の警察官が周囲の交通を遮断した。そして数百人の機動隊が催涙ガスを撃ちこみながら、コン棒と特殊レンガで武装し、はしごを使って四階講堂に乱入し、勇敢にこれとたたかった女子労働者や新民党員に無差別の暴行をはたらき女子労働者一七六名、新民党員二六名を逮捕したのである。この残忍な蛮行に対して、女子労働者は抗議自殺をも決意して最後までこの武装襲撃にたちむかったが、この過程で金景淑さん（二十一才）は無惨に殺害されたのである。

機動隊の弾圧はそれにとどまらず、さらに会議室におし入り、対策を協議していた金泳三（キム・ヨンサミ）新民党総裁や国会議員、新聞記者にまで暴行をはたらき、「調子にのるとみな殺しだ！」とあらんかぎりの暴言をはいて、強制的に退去させたのである。

「近代化の働き手として血と汗を流しながら経済開発の先頭に立ち、輸出が根本となっていたので企業を育て、国家に忠誠を尽し、父母には孝行してきた勤労者たちが、生存を脅かされる緊急な状況の下で寄り集まり、哀切に生存権を訴え、主張した」（四・一三全国繊維労働組合YH貿易支部アピール）その訴えに対する朴の回答が血の弾圧なのである。

## 経済破綻の犠牲にさらされる韓国労働者

YH貿易は一九六六年、従業員わずか十数名のかつら工場として設立された。これが輸出振興策に乗って四年後四千人の従業員、輸出実績一千万ドル、全輸出企業中十五位にランクされるところにまで成長し「鉄塔産業章」まで受章した。ところが同年、社長の張龍虎（チャン・ヨンホ）が突然社長職を姻戚の陳副社長に譲り、自ら会長となって渡米、別会社を設立した。陳はこのあと総額三百万ドルにのぼる商品をこの別会社に流し、七六年二月千二百人の労働者を解雇して退社するのである。そして七七年、三代目の社長・パク・チョンウォンは、経営不振を口実に人員削減を強行し、千八百人の従業員を一年六カ月のうちに六百人に削減したのである。

このような中で、ほとんどが女子労働者で地方出身者というYH貿易労働者は、生存権の確保を政府機関・労総（韓国労働総同盟）に訴え、一定の合意をとりつけたが、経営者は三月三十日にこれを破棄して「四月をもって廃業」との公告を出してきたのである。

こうして闘争が現在に至るまで続けられてきたのである。

このYH貿易労働者にみられる労働者への一切の犠牲の転嫁は、あらゆるところで行われている。

栗山グループの倒産によって首を切られた八千人の労働者には、いまだに未払い賃金すら支払われていない。そして同じようにろう城闘争を行っている。企業倒産―首切りに加えて現在操業している所でも賃金未払いのところがざらで、それらを入れると、今年五月末で三百社の未払い賃金百三十六億四百万ウォン（昨年同期の七倍）、八万五千人の労働者が被害をうけている。失業者は昨年にも増して拡大し、十万人も多い五十五万人（政府予想）にもなろうとしている。

このような高度成長を支え、そしてその犠牲のしわよせをもろにうけている韓国労働者の実態で、特徴的な事項をみてみると、次のようなことがあげられる。

①若年労働者が多く（従って低賃金）、特に女性が多いこと。

一九七七年末の全人口三六〇一万、うち十四才以上の全産業人口（失業者を含む）は一三四四万人（男八五二万人、女四九二万人）。この中で年令別男女労働者の割合を見てみると、二十五才未満は二五・四％（日本は一三・五％）。特に女性にあっては三三・〇％（日本一七％）。そして産業別男女労働者比率を見ると、製造業で女性が八〇・三％と集中し、このうち二十五才未満の女性は、五人以上の企業で八四・三％という高率になっている。

今回のYH貿易、あるいは平和市場の女性労働者の決起をみるまでもなく、いかに若年の女子労働者が低賃金のゆえに数多く資本の搾取の対象とされているかわかる。

②圧倒的な下層労働者の存在。

所得別勤労者分布は、七七年で課税対象者の三万ウォン（百ウォンは約四十円）にも満たない者が七四・九％と圧倒的である。しかもたとえば五人家族の一ヵ月最低生活費は七七年八万ウォン強（政府基準）として、それにも満たない者は八〇％以上もある。しかもそれは政府の発表だから実際はもっとひどいはずだ。

従って労働者の多くは家族の臨時収入、あるいは学校を卒業したばかりの子供（十四才から）の収入をその補助としなければならないことが統計の上でもわかる。

③そしてこうしたことの結果として劣悪な労働条件、労働強化が行われているのである。

低賃金のゆえに、若年の家族の労働に加えて、時間外労働による収入増がはかられる。

七七年の各国製造業の週当たり労働時間をみると韓国では五四・四時間、日本四四・六時間となっている。五人以上の製造業における週平均労働時間は、男子二四四時間、女子二四七時間で女子の方が長い。

このような労働強化は、韓国経済の死命を制する輸出企業に多くみられる。朴が七七年輸出目標を百億ドルとかかげた時、輸出企業に対して労働時間を一日二時間、週十二時間延長を認め、八時間労働を規定した勤労基準法を無視してまで労働強化がおこなわれているのだ。

以上のような徹底した人民搾取の上にたって高度成長が保障されてきたのであり、吹きあれるインフレと生活破壊は、韓国民衆の忍耐の限度をこえるものとなっているのだ。

## 韓国労働者の決起に合流する反朴勢力の前進

この耐えがたい生活破壊に、やむにやまれぬ決起をなしてきた労働者のたたかいは反朴闘争の広範な結合を生みだし、朴の支配をズタズタにせんとしている。

労働者人民の反朴闘争への決起をおさえこむべく、一方でKCIAの手先韓国労総を駆使して労働者を懐柔し、他方、「国家保衛特別措置法」あるいは馬山にみられる「外資企業臨時特例法」などで労働三権をことごとく奪ってきたのである。

したがって、労働者の〝許されうる〟ぎりぎりの合法的なたたかいとしては「ろう城」闘争などの手段しか残されていない。

こうした中で、今回のYH貿易労働者たちが、最後に新民党におもむきろう城したことは、反朴闘争の大きな転回を意味している。

七〇年代にはいり、労働者のたたかいが拡大する中で、平和市場、邦林紡績、東一紡績のたたかいに対し、反朴民主化闘争を担ってきた学生、知識人、キリスト者たちが、今回においても積極的に加わり闘いぬいてきた。このことは、YH貿易労働者弾圧後、「宗教に名をかりた不純団体が労働組合、農民運動に浸透している実態を調査し、報告せよ」と法務長官に命じ、都市産業宣教会をはじめとした民主団体、キリスト者の解体をねらっていることをみても明らかである。

このような労働運動と反朴民主化闘争の結合に加えて、国会野党第一党の新民党が金泳三の総裁選出を機に、朴打倒を鮮明にしてこれと結合したのである。

金泳三は新民党総裁選に出馬のさい、「民主回復闘争の正規軍に党を再編成する」と決意を語り、五月党大会において朴に通じる李哲承とせりあって、三七八対三六七票（その他六票）という過半数を二票上回る得票で総裁に当選した。七六年当時における反主流派李哲承らの暴力による党大会独占という党内の紛糾は、朴の維新体制における無力な野党の姿として民衆の失望と冷笑をかっていた。

しかしながら、今日、韓国民衆の打ち続く反朴闘争への決起と労働者階級の広範な怒りの爆発は、新民党をゆさぶり、反朴の立場を鮮明にうちだすことを要求したのである。

# 金景淑さんのオモニへの手紙

金景淑さん

金景淑さん（二一才）は全羅南道光州で生まれ、光州国民学校を卒業後は十三才でソウル市内の繊維会社に就職した。四年前に父・金東雲氏が病気で他界してからは、行商をする母・崔英子さんを助け、弟・俊坤君（全南機械工高三年）の学費のめんどうをみてきた。

YH貿易には七七年就職、争議に際してはYH貿易労組常任執行委員として、声明書・決議文などを朗読するなど、ろう城闘争の最先頭に立ってきた。

以下にかかげる文章は、虐殺の四日前の八月七日に田舎の母と弟にあてて書かれた手紙である。

＜前略＞

最近、会社の問題で、お会いできませんが、お手紙でおたよりします。私がいる会社はたいへん大きな会社です。

しかし数年前に張龍虎会長がアメリカにお金を外貨逃避させ、従業員たちの暮しはより苦しくなりました。私の会社は外国輸出品で「大統領」賞までもらったのに、金持の会長や社長は自分たちだけよく暮らそうと私たち従業員を見すてて逃げたのです。ところが今の社長はとても操業はできないと廃業公告まで出しました。でも私たち力の弱い従業員は力をあわせ団結して闘っています。

いま会社は、私たちの力が強く、互いに助けあい笑いながら楽しくすごしています。

特に知っておいてほしいことは、私たちの力が強いので、いろいろな手段と方法を使い会社の社長があらゆる企てをするかも知れませんから、あまり心配なさらずに私の手紙以外には決して信用しないで下さい。

私たちが力をあわせれば問題は必ず解決されます。

夏の移ろいやすい日に苦労なされるオモニの姿は遠く離れても忘れはしません。

オモニ！ここを辞めて他に就職しようとしても、引き続く物価上昇により、失業者たちが日毎に増えています。職を探すこともできない実情です。又、ここで働く年幼い労働者たちのために最後まで団結して私たちは必ず勝利するでしょう。

くりかえしいいますが自分がやることは自分でよくわかってやっています。俊坤は最後まで姉さんの力で助けてあげます。

この会社問題が解決されたらまた会いに帰ります。

社長やアメリカにいる会長張龍虎のような金持ちは自分だけ豪勢に暮し、金のない者を思いどおりに使うだけです。けれどもお金のない者は善良な気持で自分たちの立場をよく考え誠実で正しく生きるものです。

オモニ！いつまでもお身体を大切に。オモニのなさろうとすることに神様のおめぐみがあらんことを心よりお祈りします。

# 韓国民衆の内乱的決起に呼応し、血債にかけ安保―日「韓」体制を打倒せよ！

金泳三は七月の国会において、タブーとされていた維新体制を批判し、緊急措置の撤廃、政治犯の即時釈放、朴政権の退陣を要求し、これによって反朴勢力の広範な結合は一挙に拡大したのである。

YH貿易労働者が新民党本部にろう城した根拠は、ここにあったのである。従って、朴にとってこのYH貿易のたたかいは、朴打倒勢力の集中的表現としてあったのであり、危機感にかられて血の弾圧を強行したのである。

不屈の反朴民主化闘争の前進、広範な労働者階級の決起、そして政治勢力の朴ばなれと反朴陣営への合流は、「高度成長」の破産と生活破壊の拡大の中で、朴ののど首につきつけられたのである。

激動する韓国情勢は、今秋期政治決戦の重大性を告げ知らせている。八〇年代階級闘争の突破口を勝利的に切りひらく上において、朴打倒に総進撃を開始した韓国民衆のたたかいをガッチリとうけとめ、日本人民の任務を鮮明にうちだし、日帝大平の戦争策動を打ち破る秋期政治決戦を断固として闘いぬかなければならない。

すなわち、第一に、朴独裁体制の危機が、帝国主義の人民支配の根底的危機としてあること、朝鮮半島における革命的内乱的危機の切迫性として突き進んでいることをつかみとらねばならない。

「高度成長」の破産は、朴の人民支配の根拠を無慈悲に打ち砕き、もはやいかなる朴の恐怖政治をも恐れぬ人民の決起が、全韓国にまきおこっているのだ。支配階級がこれまでの支配を続けることができなくなり、しかも人民大衆もまた、この支配の下ではもはやささやかな生活すら破壊される以外になくなっている。この支配を打ち倒すことによってしか生きる道はなくなっているのだ。

そして朴打倒のたたかいは帝国主義の支配を一掃するところにまで突き進む。朴独裁を支え、韓国民衆、朝鮮人民に対する暗黒の支配と苦渋を強いてきた元凶こそが日帝であり米帝なのだ。

われわれは、韓国民衆がひきずりだした朴独裁―帝国主義の崩壊的危機を、更にわれわれ自身の全精力を傾けて拡大させなければならない。日帝の朝鮮―アジア侵略反革命の野望を、出口のないドン詰まりへと追いこめ、韓国民衆の革命的決起にトコトン応えて日帝を打ち砕かねばならない。全党の任務をこの一点に打ちすえ、革命戦争の思想と行動を獲得すべく全体重をかけて秋期決戦をうちぬかねばならない。

第二に、われわれは、日帝がこの体制的危機の突破口を、朝鮮出兵と国内人民の戦争への動員に求めていることを確認し、戦争策動のもくろみを打ち破る全人民のたたかいを爆発させねばならない。

八〇年安保―防衛二法改悪を急ピッチで進める日帝の野望は、帝国主義者どもの唯一の生命線、朝鮮―アジアの支配にむけられている。もはや軍事をもってしか支配を実現しえない。朴を護持することができないところに追いつめられたのだ。

日帝大平の国内人民の収奪と圧殺、天皇を頂点とした反革命的国民統一、労働運動の右翼的再編、そして三里塚・狭山を頂点とした革命的人民派の解体は、今や朝鮮危機の現実の中で急激におし進められている。われわれは、この日帝大平のもくろみをはっきりと全人民に訴え、朝鮮出兵策動を打ち破るたたかいへの決起をつくりださねばならない。戦争への国民動員をめざす反動攻勢を打ち破るたたかいを三里塚・狭山を突破口に、革命的労働者人民の決起と結びつきかならずやりとげねばならない。一〇・二〇反戦集会をその出発点とせよ！

第三に、われわれは、死を賭してたたかいぬく韓国民衆のその革命精神をうけつぎ、わがものとし、全党の飛躍をかちとらねばならない。

三・一独立決起、四・一九学生革命と打ち続く歴史的決起の中で、朝鮮人民は無数の屍を乗りこえたたかいぬいてきた。反朴民主化闘争を果敢にたたかう人民の中に脈々と流れる革命精神は、獄壁をも突き破る強靱な力を生みだしている。

そして七〇年、われとわが身を燃やして労働者の決起を訴えたジョン・テイルの決起は全労働者の魂をゆさぶり、七〇年代労働運動の大爆発を生みだした。YH貿易労働者は機動隊の突入を前に、「緊急決死総会」を開き、「最後の一人まで死で立ちむかおう」と決議し、金景淑はその最先頭でたたかいぬいた。

維新体制という、戦前の日帝植民地支配を上回る弾圧下において、一つの労働争議を通して示しぬかれた女子労働者の死を賭したたたかいは、韓国民衆、朝鮮人民の革命的精神をはっきりと示しぬいている。母と弟の生活をみながら貧困の中でたたかいぬいてきた金景淑の決意は、いかなる弾圧もおそれぬ勝利への確信をつきつけている。

われわれは、この韓国労働者の魂を断固受けつごう。金芝河は「韓国民衆が反対してきたものを守ってきた」日本人民に対し、これを逆転することを呼びかけた。また全泰壱のオモニ李小仙は「韓国労働者たちのこのように廉価な奴隷労働が日本の労働者たちの人間らしい生活の実現をさえぎる大きな障害となるのはいうまでもありません」（『日本民衆への手紙』）と語り、この構造をつくりだした者たち、この中で利益を生みだしている者たちに対する「共同の闘争」を訴えている。

まさに問われているのは日本の人民であり、「なすべきこと」をやりぬいている韓国民衆に対して、われわれ自身いかに応えるかが問われているのだ。

戦旗派と全党・全人民は韓国民衆の精神をわがものとし、全身全霊をかけなすべきことをやりぬこう。真に人民に依拠し、被抑圧民族人民の利害を守りぬく戦旗派への飛躍をかちとり、朝鮮出兵阻止・八〇年代安保―日「韓」闘争をたたかいぬこう。

今秋期政治決戦の一大頂点たる一〇・二〇闘争への全国からの決起をかちとり、今こそ朝鮮人民への血債にかけ進撃せよ！

なかでも、管制塔を破壊した戦士達には「航空危険罪」という重罪を科してきたのです。

管制塔被告はこの重罪攻撃をはねのけ、花尻裁判長による月三回全日公判指定を打ち破るべく公判闘争を闘っています。

しかし、保釈を認められないため弁護人との接見や、被告同士の打ち合わせをいちじるしく制限され、また公正な裁判を克ち取るための訴訟準備さえも、非常に困難な状態が続いています。

しかも、長きにわたる勾留生活のため、歩行困難や健康を害する仲間も出ています。

裁判所が彼らを釈放しないのは、被告の自由を奪う事によって拙速裁判を行おうという全く不法・違法なもくろみ以外ではありません。

「弁護人抜き法案」制定をめぐる「法曹三者合意」等に見られるように、司法の反動化が増々強められ、弁護活動が非常に制限されてきている現在、憲法の保障する弁護権・防御権の正当な行使のためにも、被告人の保釈を克ち取る事は不可欠の条件です。

一人でも多くの方々の署名とカンパを心から訴えます。

# 管制塔戦士―水野・山下・佐藤君の即時保釈を訴えます

水の・さとう君を守る会
三里塚獄中戦士を支える会
神奈川管制塔裁判に勝利し戦士を支える会

三里塚開港阻止決戦を闘い抜いた多くの被告達は、現在、そのほとんどが保釈を克ちとっていますが、最も先頭で闘った管制塔戦士は一年半にもわたる獄中生活を今だに強いられています。

彼らは三里塚農民の正義と大義を守り抜き開港を阻止せんと管制塔を占拠して闘いました。

そして今もなお、自からの正当性と政府―公団の不当性・違法性を訴え、公判闘争を獄中より元気に闘っています。

そもそも、成田空港はその建設に着手した段階から、まったく農民を無視したものでした。

三里塚ではたらく農民にただの一言も相談なく、いきなり「空港をつくるから出ていけ！」と立ち退きを要請し、立木に鎖で身体をしばりつけ抵抗する農民をクレーン車で引き倒し、武装した機動隊の暴力で政府―公団は空港建設を強行してきたのです。

反対するものは殺してもかまわないとばかりに政府―公団―機動隊は大木よねばあさんに襲いかかり、東山薫君をガス銃でねらい射ち、ことごとく死に至らしめたのです。

生きる為の権利を守るため、たち上がった農民の姿に多くの人々が心を同じくし、開港阻止決戦を闘いました。

国家権力は開港阻止決戦を闘った人々をなんと一六〇名も不当逮捕し、大量起訴攻撃をかけてきました。